

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 29 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24593430

研究課題名(和文)慢性疾患の子どものインクルージョン促進のための啓発教育プログラムの開発と評価

研究課題名(英文)Evaluation of a inclusive education program to support Schoolchildren with chronic disease

研究代表者

竹鼻 ゆかり(TAKEHANA, Yukari)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：30296545

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では主として以下の3点を明らかにした。
教員を対象とした慢性疾患の子どものインクルージョンを促進するための啓発教育プログラムを、開発し、その有効性を検証した。病気の子どもに対する一般の子どもの認識と受けとめについて、インタビューとアンケート調査をし、インクルージョンを促進するために一般の子どもに必要な教育内容を明らかにした。病気の子どもに対応する教員の課題や困難感についてインタビューとアンケート調査し、病気の子どもを支援する際の教員の役割や課題を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study was clarified following three points.
This study was to evaluate the inclusive education teacher's program to support children with chronic disease. And this study was to clarify the recognition of children of friends with chronic disease. In addition, this study suggested that teacher's support for children with chronic disease.

研究分野：学校保健

キーワード：小児慢性疾患 インクルーシブ教育 学校生活

1. 研究開始当初の背景

現在、子どもの健康課題は複雑多様化している。アメリカの過去 30 年間にわたる大規模コホート調査結果からは、子どもの肥満やアレルギーなどの慢性疾患の増加が示されている (Cleave JV, et al.2010)。日本の小児慢性特定疾患治療研究事業の報告においても、子どもの慢性疾患は増加傾向にあり、2000 年度の登録者は小中学生の 200 人に 1 人であった。

よって、学校においても多様な病気の子どもの増加することが予測される。そのため今後、学校教育においても健康増進や疾病予防を目的とした健康教育と同様に、通常学級に通う子どもが、病気の子どもたちを理解し支援するための啓発教育は不可欠となる。

しかしながら日本の学校教育においては、教科保健をはじめとし生活習慣病などの予防教育は行われていても、病気をともに生きる人々を理解するような啓発教育はほとんど行われていない。

病気の子どもを担当する教員にも課題はある。学校管理下で特に注意が必要となる疾患を持つ子どもに対して教員は、学校管理指導票に基づいてその子どもの学校生活を管理する。しかし教員は、教員養成課程や教員研修において病気の知識や支援方法について学習する機会はほとんどない。そのため、病気の子どもが入学した時点で、教員は試行錯誤しながらその対応にあたることになる。2003 年 3 月末に出された文部科学省答申「今後の特別支援教育の在り方について (最終報告)」においても、通常学級に在籍する病気療養児の特別支援に関しては一切述べられていない。よって、教員に対しても病気の子どもを理解し支援する研修や啓発教育を行うことは急務の課題である。

つまり、教員と周囲の友人の病気の子どもに対する理解と支援を促すことは、病気の子どもたちの教育保障を進めるとうえで必要不可欠である。

さらに、学校において病気の子どもの理解と支援を促す教育を行うことは、すべての子どもたちが社会に出た折に、病気などの弱者を支え、共に生きることを考えるための視座を与えることができる。また共学・協働と発達保障を謳うインクルージョンの実現を迫る学校教育のあり方を模索するうえでの基礎資料とも成り得る。

2. 研究の目的

本研究の目的は、教諭や養護教諭ならびに、通常学級の子どもを対象とし、慢性疾患の子どものインクルーシブ教育を促進するための啓発教育プログラムを、開発・実践し、その効果を検証することである。

具体的には以下 3 点を目的とした。

(1) 通常学級の子どもが、病気の子どもを受け入れるうえでどのような考えを持ち、行動するのかを明らかにする。(研究 1.2.3)

(2) 通常学級の担任は、病気と病気の子どもに対しどのような認識をもっているのかを明らかにする。(研究 4.5.6)

(3) インクルーシブ教育を促進するため、教諭・養護教諭向け、生徒向けの教材を作成し、の有効性を評価する。(研究 7.8.9)

3. 研究の方法

(1) 病気の子どもに対する一般の子どもの認識調査

研究 1：子どもの頃に何らかの病気の友達がいいた大学生 16 名を対象とし、病気の友達を通じて得たその子どもや病気に対する考え、その後の考えの変化などについて半構造的面接を行い、M-GTA により質的分析を行った。

研究 2：小学校 2、4、6 年生 (172 名)、中学校 2 年生 (30 名)、高校 2 年生 (165 名) を対象に Draw-and-Write technique 方法により、一般の子どもが病気と病気の子どもをどのように認識しているかを調査した。

研究 3：中学生 513 人を対象に、病気と病気の子どもに対する認識と行動について、自記式質問紙法により調査した。

(2) 病気の子どもに対する教員の認識調査

研究 4：院内学級の教員が病気のある子どもと関わるうえでの教育的配慮、ならびに病弱教育の課題を明らかにするため、東京都内の院内学級に勤務する教員 3 名、および病弱特別支援学校での勤務経験のある教員 1 名に対し半構造化インタビューを実施し、M-GTA により質的分析を行った。

研究 5：病気の子どもを支援するうえでの教員の役割や課題を明らかにするため、病気の子どもを担当したことのある養護教諭 7 名、学級担任 7 名に対し、半構造化インタビューを実施し、M-GTA により質的分析を行った。

研究 6：病気の子どもを支援するうえでの教員の役割や課題を明らかにするため、小学校の担任 361 名に対し、自記式質問紙法により調査した。

(3) インクルーシブ教育を促進するための教材開発

研究 7：教員向けの教材として、ケースメソッド教育におけるケース・ブック集『ケースメソッド教育に活かす学校用ケース・ブック

ク』ならびに『ケースメソッド教育に活かす学校用ケース・ブック ティーチング・ノート』を作成し、養護教諭や大学院生に対し、病気や障害をもつ子どもの理解を促すケースメソッド教育を行った。

研究 8：病気に関する講義とケースメソッドを用いた演習により、病気の子どもの理解と支援を促す教員用研修プログラムを作成、評価した。

研究 9：中学 3 年生 157 名を対象に、修学旅行の事前指導を通して、食物アレルギーのある生徒の自己管理行動の促進、および緊急事態が起きたときに適切な対応ができるピアサポート力の育成をねらいとしたプログラムを作成し、評価した。

4. 研究成果

(1) 病気の子どもに対する一般の子どもの認識調査

研究 1：小・中・高校時代に慢性疾患のある友達と過ごした女子大学生の認識と受け止め - M-GTA を用いた分析

本研究の目的は、小学校から高校までに出会った慢性疾患がある友達をどのように認識していたのか、また現在はそれをどのように受け止めているのかを明らかにすることである。

研究承諾の得られた女子大学生 14 名に、病気の友達の様子、病気の友人を通じて考えたことなどを半構造化面接にて調査し、M-GTA を用いて分析した。

その結果、16 の概念と 7 つのサブカテゴリー、3 つのカテゴリーを生成した。

女子大学生は子どもの頃、【友達が病気であることを認識したための疑問や感情】において、病気の友達に対して、特別な存在であることへの疑問 と 教室内での位置や成長発達に伴い薄くなる存在への戸惑いを持つことにより、病気であることを知るために抱く葛藤を抱いていた。また【病気とは異なる観点で認識する友達の存在】では、

病気にかかわらず示された存在感が分かることによって、病気を認めたくえでの友達としての対応を行えるようになっていた。この 2 つのカテゴリーは、病気の友達に対するアンビバレントな関係性であった。

更に、女子大学生が当時を振り返ったとき病気の友達に対して、理解や共感を示し肯定的な受け止めをするようになった故に、もっと配慮できたのではいかという反省や後悔の念を抱く 関わりかたへの苦い思いをするようになった。つまり女子大学生が

【子どもの頃に出会った病気の友達への後悔を伴った理解】をするようになる思考の内省的プロセスが明らかとなった。

よって、教員は早い段階から学級指導や健康相談・健康相談活動において、病気の子どもとかかわる周囲の子もたちの体験や認識を受け止め、病気とともに生きることの意味や病気に対する考え方や価値観を育てる必要があることが示唆された。

研究 2：小中高校生への病気に対するイメージ
本研究の目的は、子どもが「病気になる」ことや「病気の友人」に対してどのような認識を持っているかを明らかにすることである。

研究承諾の得られた小学校 2,4,6 年生 172 名、中学校 2 年生 30 名、高校 2 年生 165 名に対し、Draw-and-Write technique 方法によって、「病気になる」ことや「病気の友人」に対してどのような認識を持っているかを尋ねた。

その結果、「病気になること」に対する認識では、【否定的・短絡的イメージ】と【人間としての成長】の 2 つのコアカテゴリーが得られた。

【否定的・短絡的イメージ】はさらに < 病気への否定的感情 > < 病気への単純な理解 > < 周りの人に与える影響 > < 友人関係の変化 > < 治ることへの願い > のカテゴリーが得られた。【人間としての成長】は、< 人間としての成長 > のカテゴリーが得られた。

「病気の友人」に対する認識は、【共感的思いと関わり】と【友人としての隔たり】の 2 つのコアカテゴリーが得られた。

【共感的思いと関わり】はさらに < 病気の友人への思いやり > < 友人としての寄り添った関わり > の 2 つのカテゴリーが得られた。

【友人としての隔たり】は < 心理的な隔たり > < 日常生活への支障 > < 無理解 > の 3 つのカテゴリーが得られた。

本研究によって、小中高生は「病気になる」ことに対して否定的・短絡的な認識をもつ一方で、人間として成長できるという肯定的な認識もあり、アンビバレンスな思いを抱いていることが明らかとなった。また、これらの認識が、「病気の友人」に対して共感的あるいは消極的な感情やイメージ、そして行動につながっていくという可能性が示された。

よって教員は、子どもの「病気」や「病気の友人」に対する肯定的支援的認識を育てる必要性が示された。

研究 3：病気の子どもに対する中学生の認識と支援行動に影響する心理社会的要因

本研究の目的は、一般の中学生は、病気と病気の子どもについて、どのような認識を持っているのか、支援行動にはどのような要因が影響しているのかを明らかにすることである。

中学生 513 人（有効回答数 440 人）を対象に、病気と病気の子どもに対する認識と行動

について、自記式質問紙法により調査した。その結果、中学生は「病気の友達」について「かわいそう」「大変そう」「心配な」イメージを持っている傾向にあった。また「病気になる」ことについては、因子分析の結果「苦痛や不安」「生活への支障や制限」の2因子が抽出された。また「病気の友達」に対するイメージとしては、因子分析の結果「共感的理解」「悲観的感情」「困惑」の3因子が抽出された。

病気の友達に対する「支援行動」を従属変数とし、「入院経験」「病気の友達の有無」「病気の家族の有無」「病気の子どもに関する経験の有無」「共感性尺度」「病気の理解」「苦痛や不安」「生活への支障や制限」「共感的理解」「悲観的感情」「困惑」を独立変数として重回帰分析をした。その結果、「支援行動」に影響する要因は、男子は、「病気の友達の有無」「共感的理解」、女子は、「共感性尺度」「共感的理解」「困惑」であった。

つまり、中学生が病気の子どもを理解し支援するための行動をとるためには、病気の友達と接する環境があること、共感性を高めること、病気の友達を理解できるような働きかけを行うことが必要であることが明らかとなった。

まとめ

研究1から3では、子どもが病気とともに生きることを意味を問い、病気や病気のある人を理解し必要な支援ができるような価値観や態度を育てるインクルーシブ教育の必要性について視座を得た。

(2) 病気の子どもに対する教員の認識調査

研究4：院内学級における教員の支援と病弱教育の課題 - M-GTA を用いた分析

本研究の目的は、院内学級の教員が病気のある子どもと関わるうえでの教育的配慮、ならびに病弱教育の課題を明らかにすることである。

対象者は、東京都内の院内学級に勤務する教員3名、および病弱特別支援学校での勤務経験のある教員1名である。半構造化インタビューを2013年8月～11月にかけて実施した。インタビュー内容は、教師との関わりや空間が子どもに与える良い影響、子どもとのかかわりに対する配慮点や工夫点、困難点、病弱教育の抱える課題と今後求めることについてである。インタビュー・データの分析はM-GTAによって分析した。

その結果、教師は病気のある子どもに対し、学力の保障はもとより、病気であってもその子の発達を保障することを目的として働きかけていることが明らかとなった。それは、<子どもの状態のアセスメント>を基盤とした、<子どもを取り巻く環境へ

の働きかけ>と<子どもに対する教師の意識的な働きかけ>であり、この働きかけが病気のある<子どもの発達の保障>につながっていた。また、病弱教育の課題としては<病弱教育に対する社会的意識の広がりへの要求>と<制度や組織の不備>が明らかとなり、病気の子どもの、発達の保障を含めた教育をつなぐ支援が求められていることが示唆された。

研究5：通常学級における病気のある子どもに対する教員の教育的支援役割を構築するプロセス - M-GTA を用いた分析

本研究の目的は、通常学級における病気のある子どもに対する教員の教育的支援役割を構築するプロセスを明らかにすることである。

病気の子どもを担当したことのある養護教諭7名、学級担任7名に対し、半構造化インタビューを実施し、M-GTAにより質的分析を行った。

その結果、15概念とそれらに基づく6カテゴリーを生成した。通常学級における病気のある子どもに対する教員の教育的支援役割の構築プロセスは、【受け入れのための環境・体制づくり】を始めとし【組織づくり】、【保護者との信頼関係づくり】を行ったうえで、【環境調整】をしながら【学校生活をみんなと一緒に暮らすための子どもへの働きかけ】が行えるようになり、最終的には【自立への促し】を行うプロセスであると説明することができた。

本研究は、通常学級において病気の子どものにかかわる教員の役割を明確にした点で意義がある。

研究6：病気の子どもに対する小学校担任の支援行動に影響する心理社会的要因

本研究の目的は、小学校の担任がとる病気の子どもの支援行動に影響を与える心理社会的要因を明らかにすることである。

小学校の担任361名に対し、自記式質問紙法により調査し、有効回答201名を分析対象とした。

因子分析の結果、「病気のイメージ」については「悲観的感情」「支障や制限」の2因子を、「病気の子どもへのイメージ」は「病気の子どもが周囲へ与えるプラスの影響」「子どもが病気によって得た精神的成長」の2因子を、「子どもの病気による支障」は「社会性と自立の遅れ」「共感的感情」「学校生活への支障」の3因子を、「病気の子どもに対する困難」は「集団生活への適応」「健康管理」「周囲との連携」「自立への支援」「環境整備」の5因子を得た。

独立変数を「子どもに対する支援行動」とし、前述の12因子と属性を従属変数とした重回帰分析を行ったところ、病気の子どもの関わった経験があるほど、「病気の子どもが

周囲へ与えるプラスの影響」があると思うほど、「社会性と自立の遅れ」がないと思うほど、「共感的感情」があるほど、「健康管理」に困難を持たないほど、「子どもに対する支援行動」がとれることが示された。

よって、教員に対して病気の子どもの社会性や自立の観点を促す働きかけが必要であることが示された。

まとめ

研究4から6では、教員の病気の子どもに対する意識と行動を明らかにしたことにより、今後のインクルーシブ教育における教員研修への視座を得た。

(3)インクルーシブ教育を促進するための教材開発

研究7：教員向けケースメソッド教育におけるケース・ブック集の作成

教員向けの教材として、ケースメソッド教育におけるケース・ブック集として『ケースメソッド教育に活かす学校用ケース・ブック』と『ケースメソッド教育に活かす学校用ケース・ブック ティーチング・ノート』を作成した。

『ケースメソッド教育に活かす学校用ケース・ブック』では、連携協力者の正木賢一がイラスト監修を行い、ケースがイメージしやすいイラストを随所に掲載した。本イラストにより、ケースを読む際のイメージ作りが容易になるよう工夫を凝らすことができた。

『ケースメソッド教育に活かす学校用ケース・ブック ティーチング・ノート』は、教員が見慣れている指導案の形式をとり、学習テーマ、発問例、展開例を示し、ケースメソッド教育を行う際の指導のポイントを分かりやすく示した。

本ケース・ブック集に掲載したケースを用いて、教諭ならびに養護教諭の研修会や大学院生の講義において、研究者らが病気や障害をもつ子どもの理解を促すケースメソッド教育を行った。その結果、参加者からは、今までにない考えや視点、解決策を得ることが出来たとの評価を得た。

本ケース・ブック集は、病気や障害の子どもの理解をテーマとしたケースメソッド教材であり、インクルーシブ教育を勧めるための教員研修の教材として有用である。

研究8：慢性疾患のある子どもを理解するための教員向け教材の開発

本研究の目的は、病気に関する講義とケースメソッドを用いた演習により、病気の子どもの理解と支援を促す研修プログラムを作成、評価することである。

プログラムは、講義(60分)とケースメソッド教育を用いた演習(90分)の2点で構成した。

プログラムの実施は以下2箇所で行った。

一つは、A大学の養護教諭一種免許状取得を志望する1年生84名に対し授業時間に講義と演習を2回に分け実施した。分析対象は、3回ともに回答し欠損値のない59名である。

もう一つは、A県における養護教諭研修会に参加した養護教諭37名に講義と演習を連続して行った。分析対象は欠損値のない34名である。

プログラムの評価は、慢性疾患に関する考えや支援方法を問う自記式質問紙による評価票を用いて行った。

講義の理解度、ケースメソッドの満足度について、学生、養護教諭ともに、概ね講義に対する理解度とケースメソッドの満足度が得られており、両者に差はなかった。

学生に行ったプログラム前後における病気の子どもの理解や支援に関する考え方の評価については、プログラム後とプログラム前の得点差は 2.08 ± 1.80 点であったのに対し、講義後とプログラム後の得点差は、 1.84 ± 1.75 点であり、有意な差はなかった。

プログラム後とプログラム前の得点差は 2.08 ± 1.80 点であったのに対し、プログラム後と講義の後の得点差は、 0.24 ± 1.50 点であり、講義後よりケースメソッド後は有意に点が高くなった。

本プログラムは学生や教員に対して、慢性疾患のある子どもの理解と支援を促すために有効である可能性が示唆された。

研究9：修学旅行の事前指導によるピアサポートを用いた食物アレルギーのある生徒の自己管理行動の促進

本研究の目的は、修学旅行の事前指導を通して、食物アレルギーのある生徒の自己管理行動の促進、および緊急事態が起きたときに適切な対応ができるピアサポート力の育成をねらいとした取り組みの有効性を評価することである。

中学3年生157名を対象に、プログラムを実施した。

プログラムは、以下3部構成とした。

- ・食物アレルギーのある生徒を対象としたグループ指導
- ・全員を対象とした全体指導
- ・食物アレルギーのある生徒および同じ班の班長と保健係を対象とした“グループ指導”

その結果、修学旅行では食物アレルギーに関するトラブルは起こらず、無事に終了した。今回の取り組みを通して、“全体指導”において事例を用いて考えさせる学習を取り入れたこと、ならびに“グループ指導”を通して、繰り返し学習・確認を行ったことは、食物アレルギーを持つ生徒の自己管理行動の促進、並びにピアサポート力の向上を目指す取り組みとして有効であっ

たことが示唆された。

まとめ

本研究において、以下の3点を明らかにできた。

教員を対象とした慢性疾患の子どものインクルージョンを促進するための啓発教育プログラムを、開発し、その有効性を検証した。

病気の子どもに対する一般の子どもの認識と受けとめについて、インタビューとアンケート調査をし、インクルージョンを促進するために一般の子どもに必要な教育内容を明らかにした。

病気の子どもに対応する教員の課題や困難感についてインタビューとアンケート調査し、病気の子どもを支援する際の教員の役割や課題を明らかにした。

本研究により、慢性疾患の子どものインクルージョン教育を促進するための視座となることを期待する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

竹鼻ゆかり、朝倉隆司、高橋浩之、小・中・高校時代に慢性疾患がある友達と過ごした女子大学生の認識と受け止め - M-GTA を用いた分析、日本健康相談活動学会誌、査読有り、10巻、2015年、21-34

加瀬涼子、竹鼻ゆかり、院内学級における教員の支援と病弱教育の課題、日本健康相談活動学会誌、査読有り、10巻、2015年、65-78

[学会発表](計5件)

池田佳織、竹鼻ゆかり、小中高校生の病気に対するイメージ、日本健康相談活動学会第11回学術集会抄録集、2015年3月1日、愛知学院大学(名古屋市)

竹鼻ゆかり、斎藤千景、加瀬涼子、岡田加奈子、鎌塚優子、慢性疾患のある子どもを理解するための教員向け教材の開発、日本健康相談活動学会第11回学術集会抄録集、2015年3月1日、愛知学院大学(名古屋市)

山城綾子、竹鼻ゆかり、高治圭吾、修学旅行の事前指導による、ピアサポートを用いたアレルギーのある生徒の自己管理行動の促進、日本健康相談活動学会第11回学術集会抄録集、2015年3月1日、愛知学院大学(名古屋市)

加瀬涼子、竹鼻ゆかり、病気のある子どもに関わる教師の配慮と病弱教育の課題、第61回日本学校保健学会、2014年11月16日、

金沢市文化ホール(金沢市)

竹鼻ゆかり、朝倉隆司、高橋浩之、慢性疾患がある小中高校時代の同級生に女子大学生が向けたまなざしと体験 - M-GTA 法を用いた分析、第60回日本学校保健学会、2013年11月17日、聖心女子大学(東京都)

[その他]

1) ホームページ

学校ケースメソッド教育研究会ホームページにおいて、成果発表を行った。

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~method/>

2) 教材作成

竹鼻ゆかり、岡田加奈子、鎌塚優子、斎藤千景(編著)、正木賢一(イラスト監修)、千葉大学、ケースメソッド教育に活かす学校用ケース・ブック、2013年

竹鼻ゆかり、斎藤千景、鎌塚優子、岡田加奈子(編著)、東京学芸大学、ケースメソッド教育に活かす学校用ケース・ブック ティーチング・ノート、2014年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹鼻 ゆかり (YUKARI TAKEHANA)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：30296545

(2) 研究分担者

高橋 浩之 (TAKAHASHI HIROYUKI)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：20197172

(3) 連携研究者

朝倉 隆司 (ASAKURA TAKASHI)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：00183731

正木 賢一 (MASAKI KENICHI)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：60313285

(4) 研究協力者

山城 綾子 (YAMASHIRO AYAKO)

日野市立七生中学校

池田 佳織 (IKEDA KAORI)

東京学芸大学大学院教育学研究科

加瀬 涼子 (KASE RYOKO)

東京学芸大学大学院教育学研究科